福山市加茂町

北山の歴史と民俗を探る

備陽史探訪の会

目次

芋原への誘い・スケジュール　1
(地図)五万分ノ一　2
北山の地勢　3
北山の産業　4
《金が出る》《古銭入りの壺を発見》　5
備後の古代　6
北山の伝説　7
《早春の花ーあしび》　9
北山の中世　11
近世の北山　18
《領主與平家》　22
北山の信仰　23
《芋原でもくふるさとの味〉名産品　36
メモ　小祠の祭神一覧　37
月ごとの祭(祀)と講のある生活の記録　38
丹下氏邸と井伏鱒二　42
北山の年表　43

(地図)一万分ノ一　裏表紙うら

表紙カットは アセビ
(本文9ページ参照)

芋原への誘い

今回は北部をという事で、福山市の最北、加茂町字北山芋原を紹介いたします。旧村名は広瀬村と言い、標高412mの高原に位置し、14の部落があります。今回はその内の一部落 芋原を中心に訪ねる事にいたします。

眼下に神辺平野を見下し、遠くには海をへだてて四国連山を見ることが出来ます。春には、日々変る山の新緑に生の力強さを教えられ、夏には木立から来る涼しい風に我を忘れ。秋は又、木の葉の落ちる何かを思い。冬は自然の厳しさを教えてくれます。又、ここから見下す夜景の美しさは、格別なものが有ります。

きれい事ばかり書きましたが、なかなか生活して行くには、大変な所でありまして、現実には過疎の村なのです。歴史的に見ますと、行政面では常に遠地にあり、産業とこれといった特別な物はありません。史料も少なく、思う様に行きませんでしたが これは何かな？と思うものもありました。幸な事に地元の人達が村誌を作ろうと努力されておられました。色々話しを伺がいながら、3月31日を目標に私達は何回か当地に足をはこびました。

春の良い日に空気を胸一ぱいすって、一日楽しく散策する事が出来るよう祈っています。（Y.S）

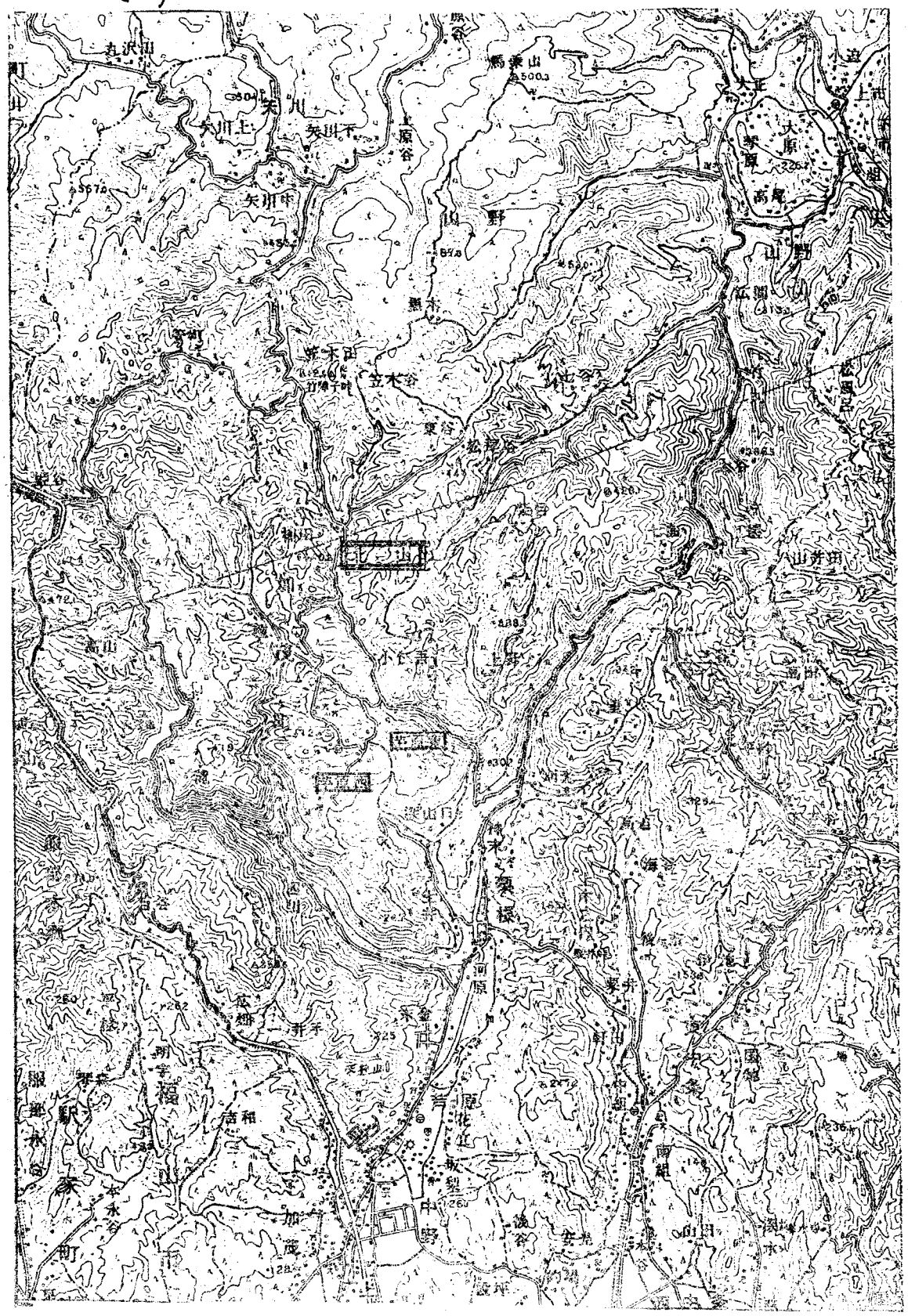
スケジュール

8時40分福山発（井笠バス）⟹ 9時30分芋原着 → 広瀬小前

→ 12時広瀬公民館（昼食）0 13時発 ⟶ 14時30分円下邸

→ 15時30分四川別（中国バス）⟹ 16時11分福山着

(2)


丸沢山
矢川
矢川上
矢川下
矢川中
上原谷
馬乗山
大正
大原
高尾
山野
笠木
笠木谷
東谷
松尾谷
高山
小仁吉
上野
八山井田
福
唐和
加茂
原花
板梨
中野
後谷
安井
河原
国組

北山の地勢

北山は旧広瀬村の一部で、京都の北山の地名をそのままにつけた村です。

標高412mの吉備高原に位置し、東西2里3丁、南北1里6丁、面積13.4方里あり、福山市の最北に位置しており、国道182号線が地域の西側を南北に縦断し、周囲は山林で囲まれています。

地質の特色は、千枚岩質粘板岩、石灰岩、及び輝緑岩、石英斑岩地帯であり、土性は壌土植壌土、植土です。

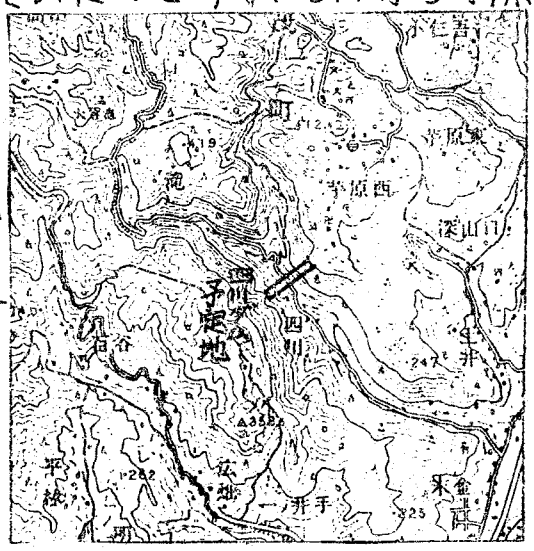
中津領時代は北山村と百谷村から成り、明治22年両村合併にともない、広瀬村（北山村―芋原・種・菅町・楠田・東谷・紫目・小仁吾・上野・苅光・滝・四川、百谷村―谷・高山・姫谷）となりました。

元来広瀬（ヒロオセ）は、元北山村と元百谷村との境、大谷池の少し下辺りの地名です。又、両村の境を流れる広瀬川の名を取り、明治22年の合併の時につけられました。当時の村長は河合虎之助氏でした。

今回は芋原と四川を中心に紹介します。

芋原は、昔は「姝原」と書いていたのですが、いつから芋原に成ったか定かではありません。標高412mの上から見る展望は神辺平野（穴の海）を眼下に見、遠くに海の中に浮かぶ島々の向に四国連山を眺めることが出来ます。

次に四川です。ここは加茂谷の一部に当たり、丹下氏邸があります。現在四川ダム建設の計画があり、57年度より本格的な調査が始まっています。



四川ダム予定地周辺

(4)

北山の産業

標高約450mの山々が中　山岳高原地帯の芋原は、昔は農業が中心で、自然を大切にし、自然の恵みにあづかって、自給自足の生活をしていました。

米作りは高原のため水田は山と山の谷間、畑と畑の間等に段々と小さな田んぼが細く上下に続いています。

畑は植壌土、植土であり耕作上の不利はありますが、土性的生産要素としては有利であります。　従来野菜類はほとんど自家用として栽培されていました。　灌漑施設が出来てからは多く出荷されています。

畜産業は、昔は各戸の働力として牛や馬がいましたが、機械化が進むにつれてほとんどの家庭からその姿を消しました。しかし、肉用牛・乳用牛・養豚・養鶏を専業とする飼養農家は年々減少してい、飼育頭数は逆に多くなっています。

林業では、総面積の内大部分が山林・原野に、樹林地の95%が天然林だったのですが、最近では植林が盛んになってきています。　林産物は、椎茸、栗、木炭、原木などです。

鉱山の歴史

① 広瀬鉱山 ――明治末期より銅鉱として稼行、戦後休山。
② 馬乗鉱山 ――S.60年前より銅鉱として稼行、現在休山。
③ 広岡鉱山 ――伝説によると元禄年間からの鉄山鉱、現在休山。
④ 甲山(かぶとやま)鉱業所 ――金・銀・硅酸を産出。

金が出る！ ＝甲山鉱業所＝

中国地方における二大金銀鉱床は 福山市の北方約16Km加茂町の中央部黒木部落の東に位置し、北は同町矢川、南は楠田部落におよび、東西南北ともに約5Kmの地域で 標高約400mの山中にあります。 甲山金銀鉱床、黒木鉱床で中でも黒木鉱床は県下随一を誇っています。

発見者は三島貫一氏です。

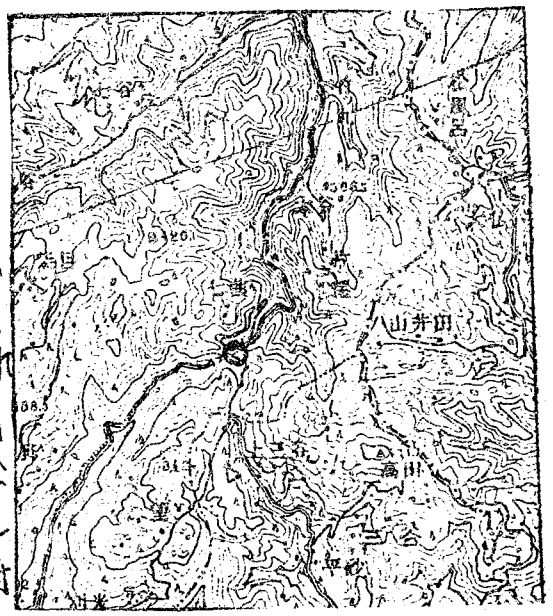
三島氏は、研究心旺盛で青年時代から附近の山々をかけ巡り、石灰石、ロウ石、粘土等の探査を続けました。

昭和27年にたまたま矢川小学校運動場で金鉱らしい石英岩を発見、その鉱石を広島造幣廠で分析した結果、微量（も当り3g）の金が含有されていることが証明されました。

昭和38年、甲山鉱を試堀した結果、露頭より優秀な金鉱であることに自信をもち、同年12月発堀申請をし、許可を得たのです。

＝古銭入の壺を発見＝

北山鯉谷の県道改修中に路傍の自然石を除去した際、その下に口経一尺位の陶製のつぼが埋蔵されているのを発見し、堀出しました。中からは寛永通宝等の一文銭小粒など約6貫匁の古銭がざくざくと現われたのです。この附近には昔庄屋文右衛門の邸宅があり、ある時強盗に押入られ有金全部奪われてからは山林内に金を埋蔵したそうです。明治初年、家は断絶し、その附近を県道が開通し、今回の改修工事でその一部が発見されたのです。



○古銭出土地

(6)

備後の古代

備後の国造　国造とは大和政権がその統制下に入った国を治める時に、元の部落国家の支配者たちをそのまま地方の官吏とさせて国造と称しました。

吉備穴国造は、備後東南部を支配していたとされます。内海は当時深く湾入していて穴海をなしていた為に名付けられました。養老5年(721)年に深津郡が分置されましたので、深津、安那両郡を支配していたと思われます。

吉備品遅国造は、備後東南部を支配下に置いて、吉備穴国造と同じ様に芦田川下流域を支配していました。品遅部は垂仁天皇と皇后佐波遅比売命の間に生まれたホムチワケノミコト(本牟智和気御子)のために各地に置かれた部民集団で、天皇家の直轄地であります。品遅公はこれを統治する伴造です。品治部の伴造が周辺に支配力を伸ばした結果、国造となったものと思われます。

備後の屯倉　屯倉とは、御宅、管家、三宅とも書かれ、大和政権が勢力を拡大するにつれて、農産物の収納を目的とする天皇の御料所としたものです。

安閑天皇二年に吉備後国に五ケ所、婀娜国に二ケ所設置されました。

吉備後国では、後城、多彌、来履、葉稚、河音に設置し、後城は備中国後月郡、多彌は同郡種村、来履は同郡出部村九履と推定されています。なお多彌は『西備名区』によれば福山市加茂町北山字種と推定しています。

備後国の成立　仁徳天皇六七年に「吉備中国」、安閑天皇二年に「吉備後国」とありますが、行政区画とは言い難く、大化改新後の天武天皇2年(673)に、備後国司が天皇に献上した記事があり、この時には行政区分が敷されていたようです。

備後国郷名　安那郡は安奈、安那と書かれていましたが、本来は穴郡で、穴国造の延長された郡名であり、更にさかのぼれば穴海にちなんで名付けられたものです。

抜屋(桜原)は、訓は不詳ですが「抜原」と書いて、「ぬばら」と普通言いますが、「茨原」の誤りであろうと言う説もあります。「茨原」であれば、茨城と同地と言う説も考えられますが広島県史ではほゞ否定しています。

『福山市史』では、神辺町川北川南、同町湯野と徳田、岡山県井原市、福山市加茂町北山を指すとする説を紹介しています。

考古資料　芋原と種を結ぶ道路の峠から石斧を発見したと聞きます。現物に接していませんが この集落では唯一の考古資料と言えます。

北山の伝説

大人　ここ芋原には、昔大人がいて、牛にスキを引かせた。そして芋原の南の辺りで石に引っかかって、力を入れたら、この土(赤土)が神辺町の山王山(他に正戸山、福山市の高山)へ飛んでいったという話が伝わっている。

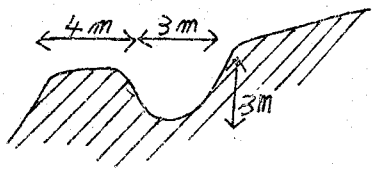
魔物の道　このスキの跡は魔物の通る道であるから、近付いてはいけないという話が伝わっている。

(8)

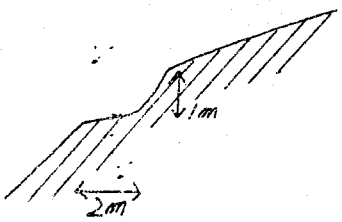
私達の調査した結果は、実際に右図①のような空堀が芋原の高地の周囲に続いていた。

一部は残存しているが、ほとんどは道路、開墾、広場等になり、残存部分は少ないが、土地の人の話を総合してみると北方の空堀の残存部分がわかりやすいが、南方にも一部ある。しかし、南方のは右図㊁のように、空堀には見えず、削平壁の様に思えます。

①



㊁



又、この空堀の中央に白い石が置かれていたそうです。(この辺には白い石は産せず、どこからか運んできたものと思われます)

後にこの白い石は八幡社の石段に、又、大師堂の横にと使用されています。それらの石は実際に見ることができましたが、元々は長さ2mぐらいの大きさだったということです。

狐にばかされた 夜、芋原へ帰ろうとした時木坂(加茂から芋原への上り口)から歩いて来た人が狐にばかされて、道に迷って、田んぼの水をためる堀に落されて死んだそうです。

夜、木坂から上がって行くと、田んぼの石垣が下から上まで見えて一番上の棚田で火をたいていたので、人が居ると思って行って見ると誰もおらず、火の跡もない。が良く見ると尾っぽの毛が落ちていて狐にだまされたとわかったそうです。

狐に盗られた 魚を買って木坂から登って来たが、帰ってみると何時の間にか魚が無くなっていたという話があります。

タコの文通 高山の読坂という所はタコが左右の谷に居て、文通をしていて、読坂で手紙を読んだという話があります。

巨石伝説　地蔵堂のうしろに巨石があります。北山の信仰の所で述べますが、巨石を取り除くと水が出なくなると伝わっています。

夫婦岩　木坂より登ったところに有るとされています。見ていませんので詳細は不明ですが、巨石が二つ連なっているそうです。

四川の谷にも巨石が有りますが、この巨石についての伝承は聞いていません。

ケヤ（ツバキ科）

ツワブキ（キク科）→

早春の花――あしび（あせび）

※表紙カット参照

古典文学の金字塔をなす「萬葉集」（20巻4516首）には"あしび"（馬酔木、馬酔、安之磨、安之美）を読んだ歌が10首あります

① 磯（イソ）の上に生（ア）ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに　（166）

② 馬酔木なす栄（サカ）えし君が穿（ホ）りし井の石井（イハイ）の水は飲めども飽かぬかも　（1128）

③ 押し照る難波を過ぎて打靡（ナビ）く草香の山を　[illegible]に吾

が越え来れば　山も狭に　咲ける馬酔木の　悪くからぬ
君を何時しかと　往きて早や見つ　(1428)

④　かはづ鳴く吉野の河の滝の上の馬酔木の花ぞ土に置くなゆめ　(1868)

⑤　吾が背子に吾が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり　(1903)

⑥　春山の馬酔木の花の悪からぬ公にはしるや寄そるとぞよし　(1926)

⑦　三諸は　人の守る山　本辺は　馬酔木花開き　末辺は
椿花開く　うらぐはし山ぞ　泣児守る山　(3222)

⑧　鴛鴦のすむ君がこの山斎今日見れば馬酔木の花も咲きにけるかも　(4511)

⑨　池水に影さへ見えて咲きにほふ馬酔木の花を袖に扱き入れな　(4512)

⑩　磯かげの見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らぬまく惜しも　(4513)

十首の歌の中で、万葉人が山野に自生して咲く「あしび」の花を眺めて、なつかしい妻に思いを寄せたり、今はてき弟に一枝手折って見せたいと願ったり、その花房をしごいて袖に入れたいとまで愛玩する様子が目に浮びます。また後には、庭園などに植えて観照していることがわかります

早春に咲く「あしび」は、つつ茅原、磯、谷間、河川、加茂など

の山野にも自生しています。常緑低木で、葉はつややかに、スズランやドウダンツツジによく似ている白花が、房状に連なり、葉を覆うようにたれ下って咲きます。

葉や茎には有毒成分が含まれており、牛、馬、鹿などが、この葉を食べると酔ったようになるところから「馬酔木」と書くのだそうです。

今ではアセビ・アセボ・アシミ・ウマクワズ・ウシコロシ・シシクワズとも呼ばれます。

3月31日頃になると、日々草木は芽吹き、日当りのよい山道には、すみれ・しゅんらん(ジジババ)が咲き、谷川の斜面には、ねこやなぎが銀色に輝きはじめ、やがて山桜の花が春爛漫をほこる季節がやってきます。

北山の中世

中世は武士の時代です。平安時代、開拓農場主として実力を蓄えて来た彼等は「源平の内乱」の中で自己の力に目ざめ、やがて源頼朝のもとに結集して、ここに鎌倉幕府の成立を見るわけです。

もちろん幕府の成立をもって直ちに武士の天下になったのだと速断するのは誤りです。まだまだ京都の公家達は大きな力を持っていましたし、興福寺、比叡山等の大社寺の力もあなどれません。

政治的に見ると、武士と公家の力が拮抗(キッコウ)していたのが鎌倉時代、武士が完全に優位に立ち、公家政権を有名無実にして行ったのが室町時代、そして、彼等が自分達独自の政権を作り出そうとして戦ったのが戦国時代です。

又、経済体制の面から見ると、この時代は荘園(ショウエン)、つまり、京都に住む公家達の私的な領地や国衙領 つまり、古代律令制

以来の国府が支配した土地を公家と武士、有力農民が分有していた時代といえます。こうした中で武士が公家の支配を排除し、農民達を武力で押えつけ、土地を自分達の一元的な支配のもとに置こうとして闘争したのが鎌倉、室町時代だったわけです。その結果が織田信長、豊臣秀吉、徳川家康によって切り開かれた、近世の、あの見事な封建体制だったのです。

ところで、こうした中世の歴史の中で、この北山の地はどんな変遷をたどって来たのでしょうか。残念ながら史料がほとんどなく、それを完全に明らかにすることはできません。けれども、『水野記』によりますと、北山村の大明神、八幡宮は仁和3年(887)の造営、高松寺は承久2年(1220)の創建と伝えています。つまりその頃にはこれらの寺社を造営する基盤があったわけで、村の成立は少なくとも平安時代の末までさかのぼると思われます。

国衙領安那郡 先ほど中世の土地は荘園と国衙領に分れていたと述べましたが、北山村はそのどちらだったのでしょうか。

史料がなく確言はできませんが、荘号が伝えられていないことから国衙領だったのではないかと思われます。

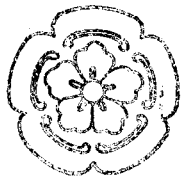
この時代、国衙領は知行国制といって、その税金を特定の公家寺社に与える制度が行なわれていました。備後国衙領も例外ではありません。室町時代初期には京都の公家「万里小路家」領となっています。そして、同家に伝わる記録『建内記』に「国衙領安那郡」の名が現われるのです。もちろん、安那郡の全部がそうだったわけではなく、郡内の国衙領をそう呼んでいたのです。そして、おそらく北山村もその内に含まれていたものと思われます。

しかし、公家が直接にこの地を支配していたわけではなく『建内記』によりますと同家では現地の管理は守護に請け負わせていたようです。さらに守護は自分の代官に実際の支配を任せていました。この場合守護は山名氏、安那郡の守護

代官は高山氏、大町氏の名が伝わっています。

もちろん、時代が下がるに従って公家は全く力を失ないますが、室町時代の初期までは一応このような体制が続いていたのです。

宮氏の支配　次に武士の問題を考えてみましょう。北山村を実際に支配していたのは誰だったのでしょうか。



宮

『水野記』によりますと、宮式部大夫という者が高松寺に寺領を寄進しています。又、四川にある中世山城跡「滝山城跡」の城主は宮氏であったと伝えています。これらのことから宮氏がこの地に勢力を持っていたのは確かだと思われます。

宮氏は備後国最大の豪族で、新市（芦品郡新市町）の亀寿山城に拠った宮氏（宮上野介家）、西城（比婆郡西城町）大富山城の久代宮氏、芦田町に本拠を置いた有地宮氏などがありました。これら宮氏一族の中で北山村に勢力を持っていたのは亀寿山城の宮氏であったと思われます。

宮氏の家紋（見聞諸家紋）

『備後国福山御領分古城記』によりますと、北山村は「宮次郎左衛門持」であったと伝えています。次郎左衛門は亀寿山城宮氏の通称（次郎左衛門 ⟶ 上野介）ですから、そう推定されるのです。しかし、彼等が直接この地を支配したわけではありません。

この時代、有力武士はその領内の各所に分家の者を居住させその支配の拠点としました。

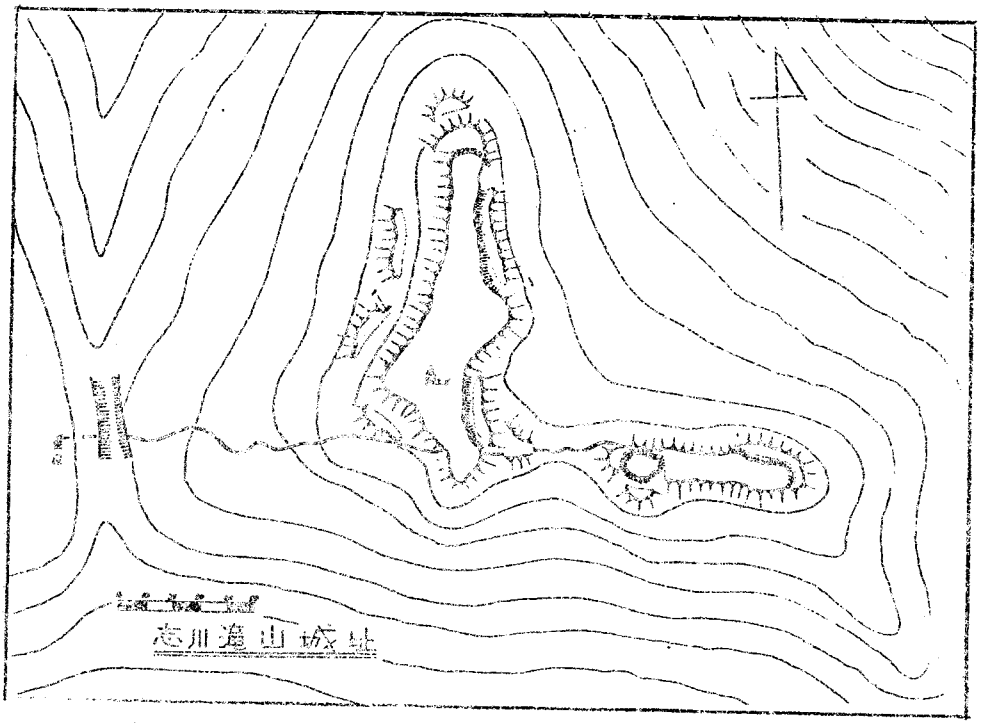
そこで、この場合本家宮氏の分家として北山村周辺を支配したのは滝山城の宮氏であったと思われます。

滝山城　『西備名区』等によりますと、滝山城を築いた

のは、元山野(福山市加茂町)戸屋ケ丸城主の宮三郎義兼というもので、それは明応元年(1492)のことと伝えています。そして、その子が滝山城合戦で有名な宮越後入道光音だというのです。

これらの伝えはどこまで真実を伝えているのか不明ですが山野は室町時代初期から亀寿山城宮氏の勢力が及んでいた地ですから、室町末期、亀寿山城宮氏の一族で山野に住んでいた者が南下して滝山城を築いたのでしょう。

滝山城は典型的な戦国の山城です。詳細は図①を参照して下さい。



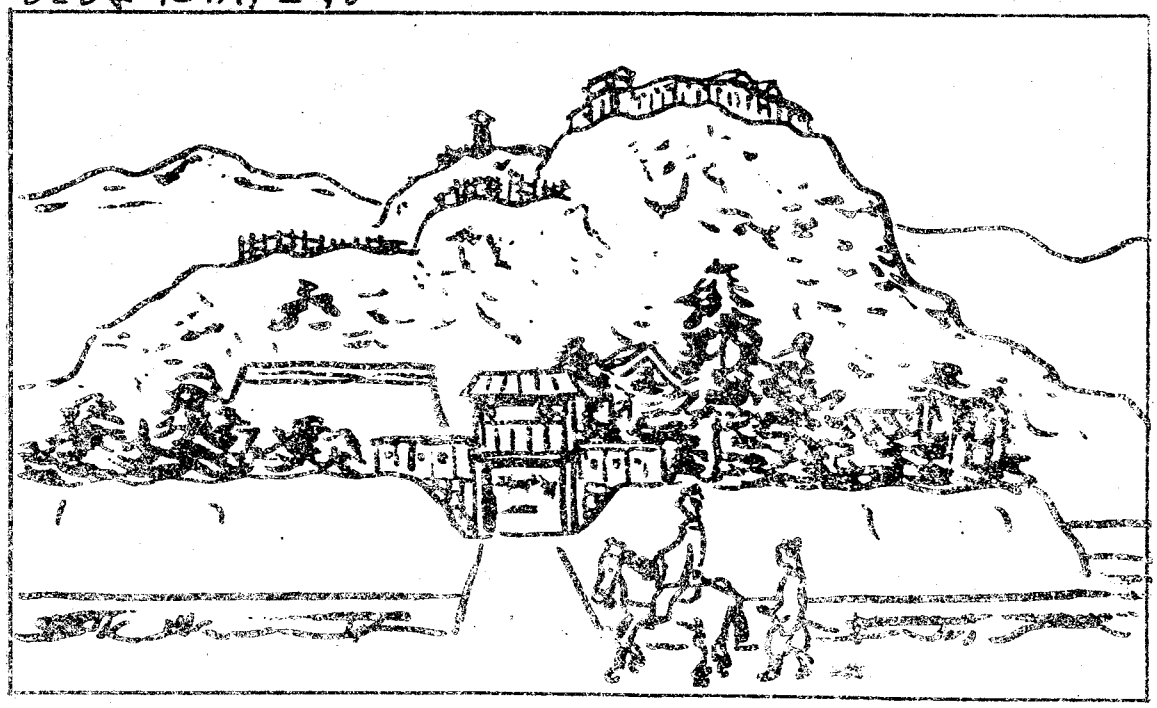
(図① 滝山城跡略測図)

志川滝山合戦 備後地方は戦国時代になりますと出雲から南下する尼子氏と防長から東進する大内氏の両勢力の間にあって、戦乱のちまたとなります。

こうした中で備後の城主達は尼子か大内か尼子かつき

大内方の羽振りが良ければ大内に味方するといった向背常ない行動を取ることになります。

滝山城宮氏も同様です。そして、最後には見通しを誤り、滅亡してしまったわけです。



中世山城の想像図

本家亀寿山城宮氏は天文3年(1534)、毛利元就に敗れて以来大内方となっていましたが、天文12年(1543)、大内氏が出雲で尼子氏に敗北すると一転して尼子方になりました。そして、大内勢の来攻を受け天文17年(1548)5月、滅亡してしまいます。

滝山城宮氏も本家と同様尼子に属していますが、天文18年(1549)備南の尼子方のれん点神辺城が落城したのちは、大内氏に服属したようです。そして、このままでいれば近世まで存続できたかも知れませんが、天文20年(1551)9月の大内義隆滅亡、同21年(1552)春の尼子晴久備後守護転就任といった情勢の中で尼子方へ走ったのです。尼子有利と見たのでしょう。

しかし、この時期の尼子は衰退期に入っていましたし、隣国の安芸には毛利元就がいて備後をねらっていました。つまり、滝山城宮

氏が尼子に寝返ったことは元就に備後に兵を出す絶好の口実を与えてしまったのです。

そして、同年7月、毛利元就は大兵を率いて備後に入り、同23日には滝山城に押し寄せ、わずか1日の戦いでこれを攻め落したのです。　あまりにあっけない結末で、滝山城の峻険さを知っている者にとってはこれは一つのなぞです。

こうして、滝山城宮氏は滅亡したのです。この後、北山村は毛利の支配下に入り、近世を迎えるのです。

尼子勝久画像

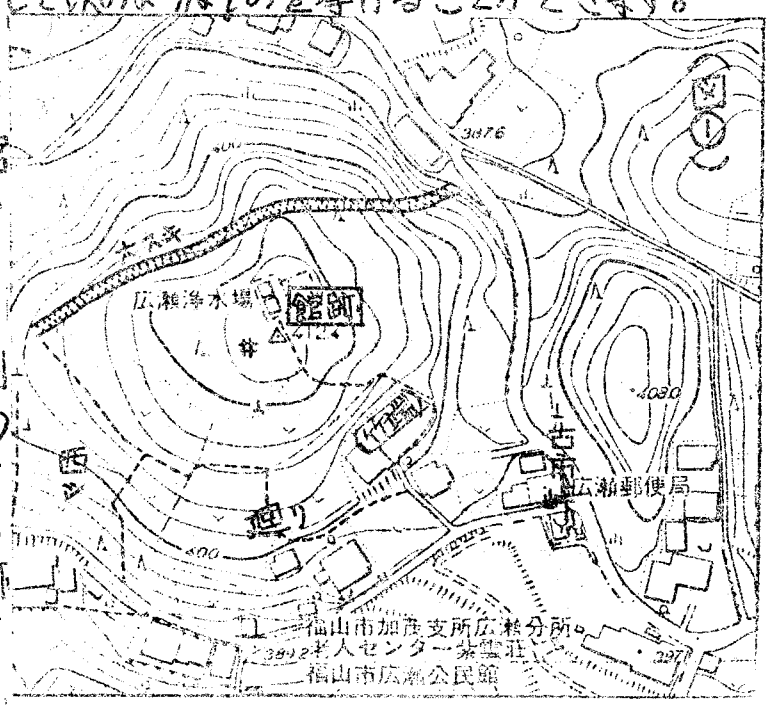
芋原の中世的地名について

北山村の中世史について、主に文献史料を用いて述べてみました。　しかし、歴史の材料は文字で表わされたものだけではありません、土地にきざまれた『地名』もその有力な史料となります。

現在、調査を進めているのは北山の中の芋原地区だけですが、同地区の中世的地名として次のようなものを挙げることができます。

(1)竹端(図①)

「たけのはた」と発音されていますが、竹は館のこん化、つまり、「館のほとり」という意味です。現地に行ってみますと、その背後の丘は頂きが削平されていて、又、井戸の跡も残っており、中世武士の館跡と見て間違いないでしょう。この館跡(『芋原館』と呼ぶこととする)はその東側に接し、



てこの地区で一番古いという旧道が通っており、南東には「古市峠」の名も残っています。古市はかつてここに市場があったことを示しています。それも中世芽原館のあった時代までさかのぼるものと思われます。つまり、この地を開発した者は交通の要地に芽原館を建て、それに接して市場を設け、この地を支配していたわけです。

（図②）

(2)土井（図②）-----「ドイ」は土塁で囲まれた屋敷地を意味し、中世武士の屋敷跡です。現地に立ってみます。と、南北のみ開けた平坦地で武士の屋敷地として格好の地です。又、ここにはどんな旱天でもかれないという「井戸」があり、この屋敷の主は水利権を支配下に置いていたのではないかと思われます

(3)貝地（図②）---- ガーチと読み（カイチとも）「垣内（カイト）」のてん化です。「垣内」の意味は諸説があって定説はありませんが、一般には垣で囲まれた土地を意味し、附近に土井、館跡が存在する場合、それらより新しい屋敷地だといわれています。つまり、芽原館や土井の主から分家した者がこの地に住し開拓を進めて行ったものと思われます。

以上、この地に中世的な地名が残っていることは、開発の古さを物語っています。

今、地名から芽原の歴史を考えてみますと、最初、この地の開発者は芽原館を築いたものと思われます。そして、土井に進出し、更に貝地方面と拓いていったのでしょう。

館と土井の前後関係は土井の方を先としても良いのですが、館の方が旧道に接っていることから、以上のように考えました。

近世の北山

豊臣が滅び、徳川の世になると、北山村の名も史料に現われるようになります。　福島、水野、天領、興平時代と支配者の変遷にそって述べてみます

福島領有

まず初めに福島時代について述べてみましょう。福島正則は豊臣秀吉子飼いの大名でしたが、関ヶ原合戦では東軍に属し、その結果、旧毛利領の うち芸備二ケ国を与えられ、広島に入城しました。まだ戦国の余風が残っていた時代です。

福島正則画像（長野県岩松院蔵）

そこで、福島氏は領内の各所に支城を築き支配の拠点としました。備後では三次、東城、三原、神辺、鞆に城が築かれています。

北山村は、いづれの支配に属したのかは不明ですが、神辺城には家老の福島丹波が入っています。

又、この時代の主な出来事として、本格的な検地が行なわれたことが挙げられます。　前代毛利氏も秀吉の命令で検地を行なっていますが、まだまだ豪族の力は強く、中世的な土地制度を一掃するまでには至っていません。

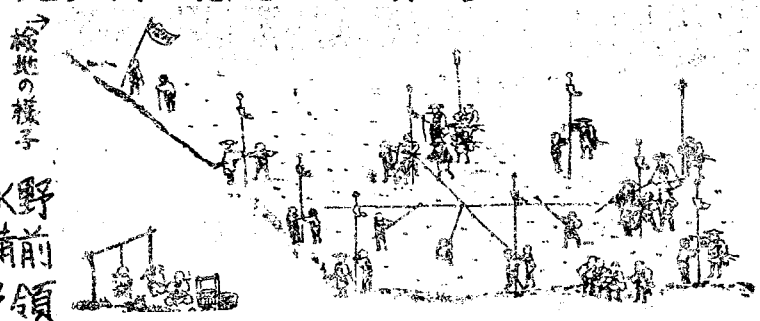
福島氏の検地はいわゆる「大閤検地」の原則に忠実にのっとって行なわれ、これによって芸備地方では初めて近世的な「村」が成立します。　北山村もこの時成立したものと推定されます。　しかし、詳細は史料がなく不明です。　ただし、村高は412石余に決定されたようで、以後この村高が水野時代までの公称石高となります。

水野時代　元和5年(1619)、福島正則が広島城無断修築の罪に問われて改易されたあと、備後10万石の大名に封ぜられたのが水野勝成です。

水野氏は徳川の譜代大名で、勝成は「鬼日向」と呼ばれた程の勇猛な武将です。　けれども彼は備後に入ると人が変ったような有能な政治家として活躍します。　福山城を築き、城下町を建設するなどetcです。

村行政の整備も彼によって確立されたものと思われます。

しかし、この水野氏も5代勝岑が幼年で死亡し、無嗣改易ということで福山を去り、北山村の支配は天領、豊前奥平家へと変って行きます。



元禄検地

元禄11年(1700)、水野家改易の後、幕府は備前岡山藩に命じて旧水野領の検地を行ないます。これが以後幕末まで年貢高の基準となった「元禄検地」です。

この結果、旧水野領は15万3千石余に決定され、その内10万石が新しく福山城主となった松平氏の領分となり、残りは幕府直轄地「天領」となります。

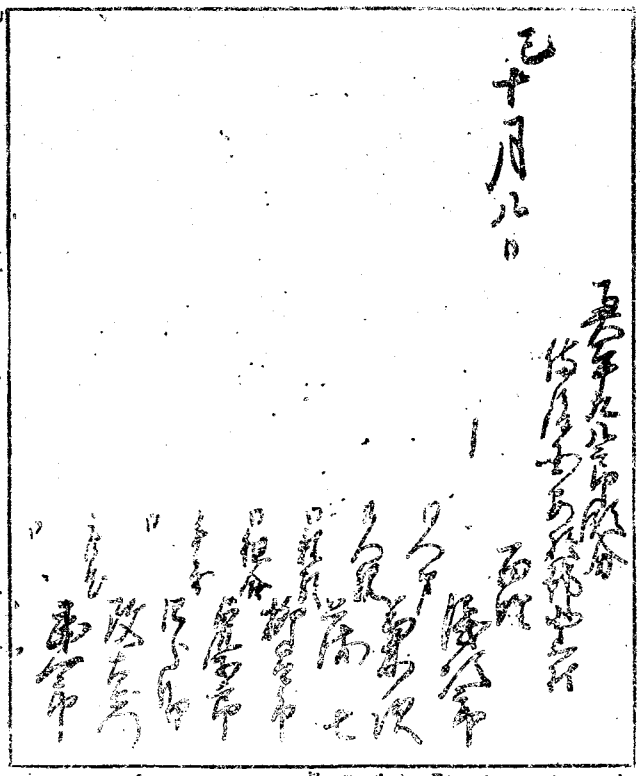
北山村もこの時、村高504石8斗7合と決定され天領に編入されています。前代の石高と比べて20石余りの減となっていますが、これは西隣に新しく「百谷村」が作られ、北山村の一部(高山でしょう)がそれに編入されたためと思われます。　つまり、この時広瀬の一部をなす百谷が近世的な村として出発したわけです。

なお、元禄検地の結果天領となった旧水野領は倉敷代官所の支配地となりますが、のち神石、甲奴、小田後月各一ケ村、安那二ケ村(北山、百谷)の99ケ村は石見大森支配となり、上下代官所の管轄となります。

中津領となる

15年間の天領時代をへて享保2年(1717)、北山・百谷両村は神石甲奴34ケ村と共に(高2万15石余)豊前中津領になります。領主は徳川譜代の奥平氏です。そして、この後幕末まで領主は変りません。

奥平氏は代官所を神石郡小畠村に置き支配の拠点としました。代官には天領庄屋として勢力のあった村田氏を任じています。又、領内の行政は代官の下に3人の大庄屋を任じて村々を三ケの組に分け、各村には庄屋、年寄、釣頭を置いて農民を支配しました。



江戸後期の村方文書、庄屋、年寄が見える(渡辺文書)

北山村、百谷村は小畠組に入れられています。江戸時代末の文書には「岡組 北山村」となっていて小畠組の名は見あたりませんが、当時小畠組の大庄屋は岡氏だったことが知られますから、大庄屋の姓に因んで「岡組」と呼んだものでしょう。

嘉永7年(1854)の中津藩書附(渡辺文書)「岡組 北山村」とある。

銀納　中津領時代で特筆すべきことの一つに年貢が米納でなく、銀納とされていたことが挙げられます。これは、この地が中津本藩と離れているため運送の便を考えてこのようにしたものと思われます。その場合、毎年10月、福山、鞆、尾道、上下4ヶ所の米相場によって年貢額を決定し、年2回に分けて納めていたようです。

又、年貢は田畠のみにかかったのではなく、当時の記録によると山年貢、数年貢、茶役、添役、大工役、木挽役、桶屋役、鍛冶役、粉屋役、諸山運上等があったようです。

定引の恩典と義民村田庄兵衛　奥平氏は当初備後中津領に対し、三千百石の年貢免除（定引）を行なっていました。これは天領時代の例にならったものでしたが、28年後の延享2年（1745）には廃止されてしまいました。

これに対し、困った備後中津領の農民達は猛烈な復活運動を行ないました。しかし、藩庁の姿勢は堅く、中々認めてもらえませんでした。

そこで立ち上ったのが「義民」村田庄兵衛です。彼は父木野村の庄屋でしたが、高蓋村庄屋大崎宅右衛門と語らって、当時厳禁されていた「直訴」を企てたのです。当然庄兵衛は藩に捕えられ牢屋につながれる身となりました。しかし、彼の行動はムダではなく、藩主の直命によって安永6年（1777）から定引の恩典が復活するのです。

社倉　江戸時代も後期になると度重なる天災に備えて米麦を貯蔵させたり、貧民に対して無利子の米銭を貸し付けたりする制度である「社倉」が各地に設けられます。備後中津領でも同様で、宝暦10年（1760）には籾3斗5升入りの200俵を備荒用として貯蔵させています。又、文化2年（1805）には領内3500戸に対し、籾種五百石を各村戸数に応じて積み立てさせ、その籾を毎年農期の初めに無利子で貸し付ける制度を初めています。

こうして、支配者達は封建社会の矛盾を必死でつくろいながら、世は『明治維新』を迎えるのです。

領主奥平家

赤松氏より別れた家、本姓は村上源氏。その祖先は、安芸の住人赤松則景の二子氏行、武蔵秩父の一族児玉の家を継ぎ平姓となるが、子孫上野の奥平を領して「奥平」と稱す。八郎左衛門貞俊の時三河に移り、作手に居り子孫相続して貞能に至る。貞能初め徳川氏に属したが、一時甲斐の武田氏に従う。長篠の戦の時再び徳川氏に帰して偉勲を建て、子信昌徳川家康の長女亀姫を娶る。天正18年徳川氏関東入国の後、貞能上野の小幡にて3万石を領すが慶長3年12月21日卒す。62才。信昌美作守を稱す。

関ヶ原役後京都の守護となり翌年美濃の加納城に移り、10万石を領す。嫡子大膳大夫家昌、別に下野の宇都宮にて10万石を領す。二子家治は上野の長根城、三子忠政は上野の吉井にて2万石、四子忠明は伊勢の亀山にて5万石を領し、元和元年3月14日信昌卒す。61才、家昌の子美作守忠昌を経て大膳亮昌能の時出羽の山形城9万石を領す。子昌章再び宇都宮に移り、其子昌成丹後の宮津に移り、享保2年更に豊前の中津城を賜り10万石を領す。

子孫相承けて明治維新に至り華族に列し、伯爵を授けられる。

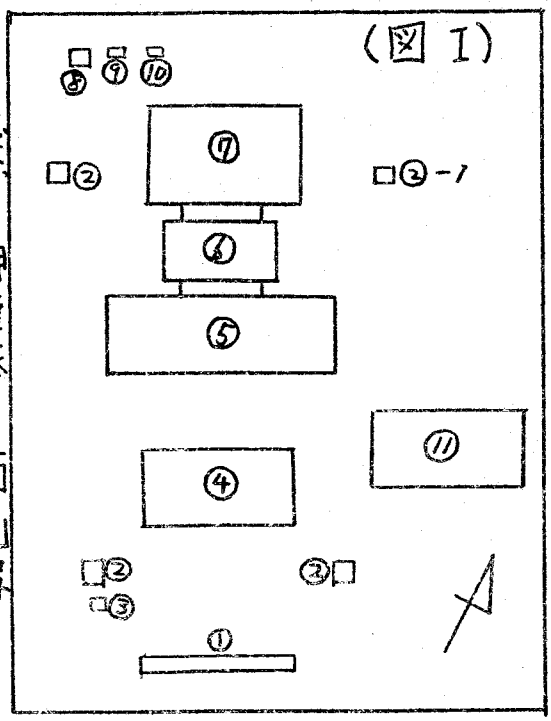
貞俊—貞久—貞勝—┬貞能—信昌—┬家昌—昌能—┌昌成（中津城主）
　　　　　　　　└貞治　　　　　└家治　　　　└
　　　　　　　　　　　　　　　　　└忠政
　　　　　　　　　　　　　　　　　└忠明
└昌敦—昌鹿—昌男—昌高—昌暢—昌猷—昌服—昌遠—昌恭（伯爵）

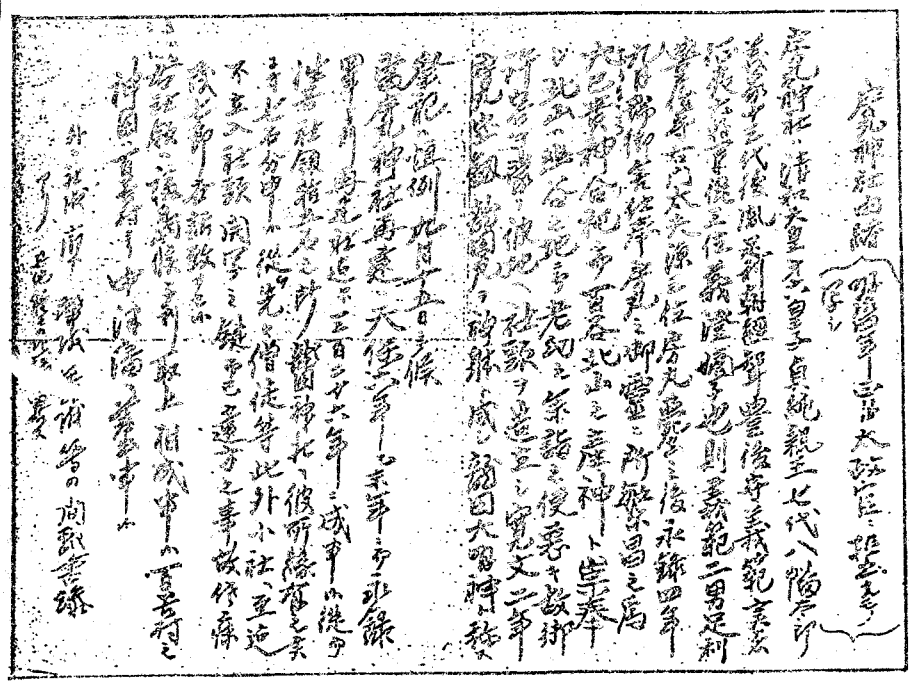
奥平氏系図

北山の信仰

龍田神社 明治初年に政府によって調べられた「縣社以下神社明細帳整備調書」によれば百谷村にある房丸神社の宝刀龍田丸を現地に奉じて、龍田大明神と崇し、後に大和国官幣大社龍田神社の分霊を仰ぎ、当社に奉遷したと記されています。

なお、右図は龍田神社の平面図、下図は「房丸神社由緒」（明治4年太政官へ提出せるもの写し）です。





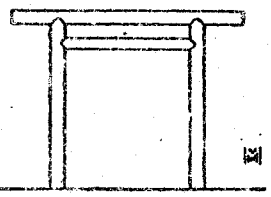
房丸神社由緒

（明治4年一月太政官ニ提出セシ写シ）

「北山ハ幽谷之地ニ而老幼之参詣之便悪キ故御許容ヲ蒙リ彼地ハ社頭ヲ造営シ寛文二年房丸宝剣龍田丸ヲ神躰ト成シ龍田大明神ト称ス」とある。

（房丸神社由緒書）

鳥　居（図Iの①）　鳥居には多様あって右図（図Ⅲ）の様な神明鳥居がもっとも古いと思われます。この所の鳥居は図Ⅳの様な明神鳥居と呼ぶ種類です。



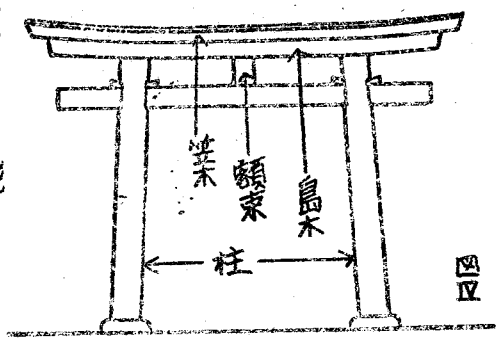
（図Ⅲ）神明鳥居

なお、鳥居の出現については次の様な説があります。

① 神社の門として参道の両側に柱を立てた。後にぐらつきを無くすために、両柱の上端をつなぐ冠木をあげた。

② 蘇民、親鸞の住家の門が鳥居の形をしていた為につくられた。

③ 鳥居は神社とは独立していて、鳥居そのものを御神体として崇めた。



図Ⅳ

④ 注連柱より変化した。自然木と自然木の間に注連縄を張ったものが、鳥居の形になった。

又、鳥居という名称の起りに就いては次の様な説があります。

① 臣民が入るから、臣人（とおりる）という名から

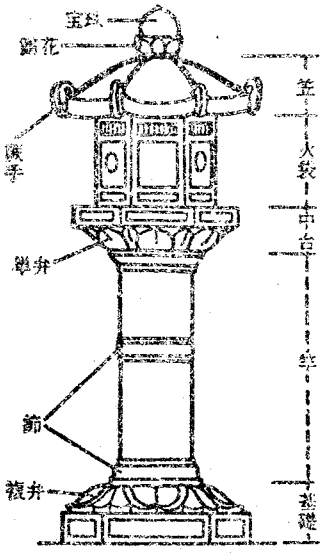
② インドの門（トーラン）から

③ 梵語（トール）から

④ カロチョン語（トール）から

石燈籠（図Iの②）　各部の名称は右図のようになっています。

仏堂前の献燈用具として、大陸から渡来し、わが国では神殿前にも用いられるようになりました。古くは正面中央に一基だけ立てていましたが桃山時代より参道をはさんで、左右一対になりました。これは火袋が四角形です。又、②ーノはその残欠です。



手水鉢（図Iの③）　神の前に出るというので、身体を清めるために置かれています。現在は使用されてい

ません。

随神門（図1の㊹）

拝殿（図1の㊺）　参拝者はここまでは上(あが)れますが、これから内へ入ることは出来ません。

幣殿（図1の㊻）

本殿　御神体はここへ祀られています。この神社の御神体（竜田丸）があった場所です。（図1の㊼）

※ 注記

足利房丸の墓碑銘は右記の通りです。
「由緒書」では房丸は征夷大将軍足利義澄の子足利義則の次男とされています。

永禄二年　足利右門大夫房丸
智泉院殿釋名心大居士
亦五月六日

元亀三年
清保院殿釋圓心大姉
申五月二十一日　足利房丸室

足利房丸、同妻の墓碑銘（最明寺　中島駅家町）

又、大和の竜田大社は、三室山の麓に鎮座して、祭神は天御柱命、国御柱命の二神で共に風を支配する神とされていますが、当社の祭神は科長津彦神、科長津姫命、大綿津見神の三神となっています。

若宮様（図1の㊽）　非業の死を遂げた人の祟りを恐れ、これを鎮める為に強力な神格の配下に置こうとして、神の御子と

いう観念に結び付けて祀られた霊をいう事もありますが、他にも神道の家で祖先の鎮まる霊舎を若宮とも言います。又、浄化した人の霊で氏神の脇に祀り、子孫のみならず氏子を守護する霊とも言われます。

祀られている人は、大夫、社人やその血脈の人とされています。祖先を若宮に持つ家を「若宮ヅキ」と呼ばれています。

元は若宮様は氏神社に祀られましたが、江戸時代末期に「復古神道」が浸透しますと、別に若宮社を境内に建立して祀る様になりました。御神体は木札か木像であり、ここの場合は木札です。この若宮様は二重墓制における詣り墓というべきものとされています。

火の神

(図1の⑨) 火産霊、かぐつちとも云います。伊弉冊尊。神は元々万物を産み成す徳がある。ゆえに産霊(むすび)の神の事をいう。「かぐつち」とは赫之霊(カガツチ)の義です。

＝復古神道＝

愛国的信仰、民族性の尊重、祖神に対する純真な信仰を柱として国学者が唱えた。賀茂真淵は国民性、本居宣長は民族性と真心、平田篤胤は幽冥信仰から俊魂の確立と、主張に差があるが、古典的基礎と国民的信念、宗教的情操を与えた。又、道統、伝授の如き宗教的儀礼的要素がない。

ミサキ様 御崎、御前等の文字を当てています。又、逆に文字の読みからゴシザキ、オンサキ等と呼び、更に文字となって思先、遠裂等となる場合があります。

ミサキのミは敬称で、サキは後に対する前の意で尊き者(ここでは神)の先駆けをする者、露払いという程度の軽微なものであって重視されなかったが、信仰としてのミサキには深い関心が寄せられ、深く根付いていきました。

ミサキ信仰(図1の⑩) 神々の定期的、又は必要に

応じての降臨を確認しようとする要求から、天候の変化、鳥獣の挙動等の自然現象の兆候を神の先駆けとして、信仰が生まれました。

神の来臨として、旧10月の亥の日に亥の子荒れという（田の神を迎える祭日）。旧11月23日の夜を二十三夜の月待ちの行事の日に雪が降る。鳥では、鳥が供え物を食べる等。ヤテイと言って氏神や鎮守の樹林のあたりに居て、異変や災難がある事を告げる為に異様な声で鳴く。

又、御崎大明神は吉備津神社のミサキで、岩山大明神は吉備津神社に従属する地主神でありますから、最初は御崎、岩山を祀る事によって吉備津神社と同じ威光を持つものとされていたが、後に主神の吉備津神社を勧請するようになって行きました。又、ミサキ信仰の中の信仰は二通りあります。一定期間だけ使者を迎え、目的を果たすと送り返す「送迎型」と、一定の場所に鎮座して神となる鎮座型があります。使者は動物です、送り返さないと繁殖して処置に困り、祀る目的を遂げた後にはその奉仕が困る等の事情から送迎型が生じたわけで鎮座型の方が新しい祀り方です。

社務所（図1の⑪）　この建物は荊光から来る道路の左側の川のそばに現在も竜王様の祠があり、元来はここに建っていたものです。八大竜王、水天、弁天等はその出所を仏典に求められる水の神で、水の辺に祀られる場合が多いが、雨乞いのため山上に祀られることもあります。

吉田家　江戸時代の寛文5年（1665）7月、幕府は「諸社禰宜神主法度」を発布した。これにより吉田家が神職管理を司どるようになりました。

吉田家は代々神祇官に出仕し亀卜を司っていました。吉田兼倶の時に吉田神道として大成された。

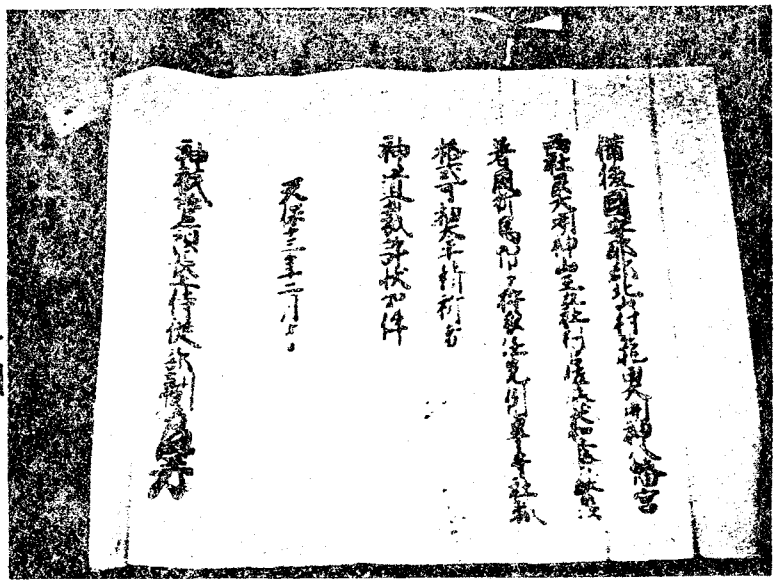
吉田神道とは、反本地垂迹説（わが国の神々こそが本地

であり、仏はその垂迹であるという説）

→

（神道裁許状）

江戸時代の神主さんはこのような免状を吉田家からもらわなければならなかった（佐藤文書）



八幡社　八幡社が二社と拝立神社、荒神社の四社が集まって四宮さんとも呼ばれる。石燈籠の残欠もあります。

八幡信仰　八幡の名の起りとして次の諸説があります。

① 大分県宇佐郡に八幡という里があります。しかし、平安中期の「延喜式」には八幡郷の名はありません。

② 焼畑（ヤキハタ）からヤハタとなったという。しかし、ヤキタにはなりそうであるが、ヤハタにはなりそうにないそうです。

③ 多くの幡（ハタ）で、固有信仰で、幡を高くかかげるという意味です。

④ 仏教の安鎮法の由来で安鎮法を修する場合に用いる八流の幡に因んだものです。

⑤ 朝鮮語で、八幡神は大陸文化と深い関係があります。又秦（ハダ）氏はハダと呼ばれてハタとは呼ばない。そして秦氏の本拠の氏神は伏見稲荷社であります。

⑥ 大陸の新しい布織の技術が伝わって、幡織りの幡から出た。又、豊前国筑城郡綾幡の郷名が見えます。この綾幡（アヤハタ）からヤハタという名ができました。

⑦ 仏教の灌頂（カンジョウ）幡は菩薩幡で、仏教のハと神道のハが合わさ

て八幡神が成立した。これにより八幡神は元々成立当初から神仏習合という特長を持っています。

仏教との関わりは上記した様に成立当初から神仏習合とされていますが、又、「宇佐神宮託宣集」には八幡神は欽明朝の時には、韓国に現われて日本の神になりました。

国家鎮護の神となったのは、神話時代には大物主命、大国主命が国家鎮護の守とされましたが、律令制国家ではこの様な蛇体で山の洞窟を棲み家とするデーモンの様な原始的な守神では任にたえられず、新たに鎮護の守が必要になったのです。

その時に神武天皇が東征した時に宇佐に立ち寄った事、南九州の隼人に対する払えの神である事や、大陸との関係で更に八幡神が注目されて、神功皇后と応神天皇の伝承が生まれて、鎮護神となりました。

「鍛冶の神」となったのは鋳鍛の材料となる金銅の神で、宇佐八幡が大仏造立に賛助したことによると言います。天神地祇、他の諸神を率いたのが八幡神とされます。八幡の御神体は黄金だという噂があって、豊後の炭焼小五郎の長者伝説が宇佐に結びついたとされます。御神体は御許山の山上の霊石とされています。

八幡社は比売神と同所に祀られ、人間菩薩の異称を比売神と云う。人間菩薩については、八幡信仰の所産で徳川時代に完成されたという説と人柱の人物という説、人巫(神巫)で巫女の一種という説があり、仏は神よりも優位という本地垂迹説により、八幡神が菩薩号の初期の名をつけた。宇佐仏教が宇佐系統の僧侶で守られた結果、此人間菩薩が出来たのです。

本地垂迹説 インドを本地とする仏が日本に垂迹(跡・權に垂・現われた)したのが神という説で、これは元々大乗仏教の根本理念に発するもので天台宗の教理に深く関っています。真言宗系を両部神道、天台宗系を山王一実神道と言います。

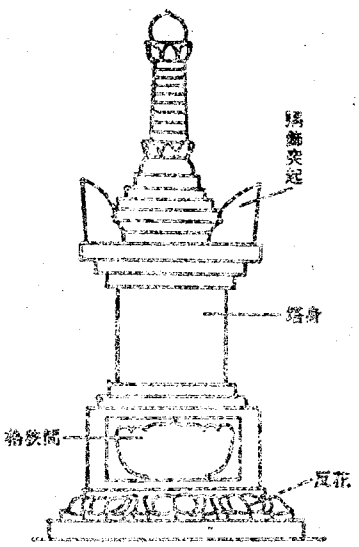
荒神信仰　二通りの祭祀法があります。屋内の火所に祀り、火の神又は火伏せの神とされるものと、屋外に屋敷神、株の神、部落の神として祭るものとがあります。

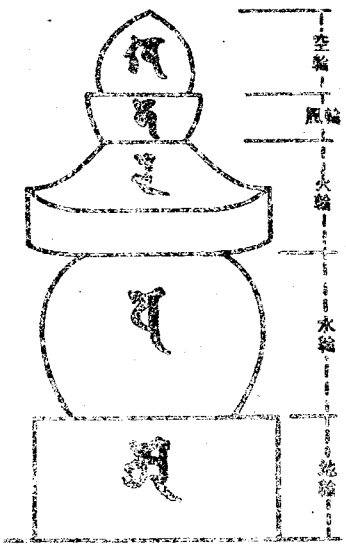
荒神は中世以降の陰陽師、祈祷師、山伏、法師、行者等の活躍によって荒神なる名称を流行させ荒神信仰を複雑にさせました。サンボウ様は食物の神。産土荒神は産土神の荒神。ダサイ荒神は太歳神の荒神。山の神荒神。ミサキ荒神。八大荒神は八大竜王の荒神。中荒神。ガラン荒神、ガロン荒神は伽藍荒神等と、他の様々の神と習合する形になります。

宝篋印塔

平面方形の一重の塔で密教系の塔で鎌倉前期から出現し、やがて宗派を越えて五輪塔と並んで流行します。

この塔の源は平安中期の頃に作られた八万四千塔と言われます。





(図VII) 宝篋印塔　　(図VIII) 五輪塔

五輪塔

方形の地輪、円形の水輪、三角の火輪、半月形の風輪、円形の空輪より成り、仏教で言う「地、水、火、風、空」の五大を現わすものとされ、平安中期以来わが国石塔の主流として流行しました。

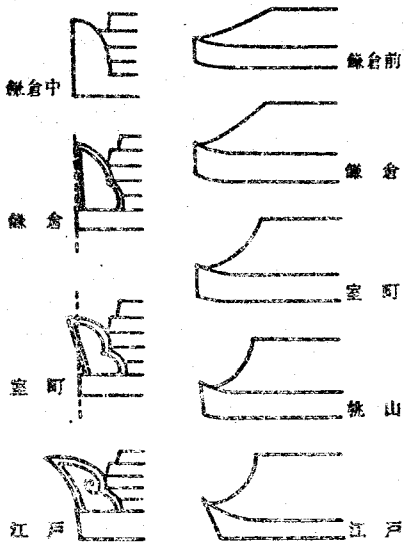
密教系の塔でありますが、鎌倉時代には宗派を越えて用いられています。

時代に様変化　宝篋印塔や五輪塔の基礎の高さは、鎌倉中期以前の物は低いものが多くあります。

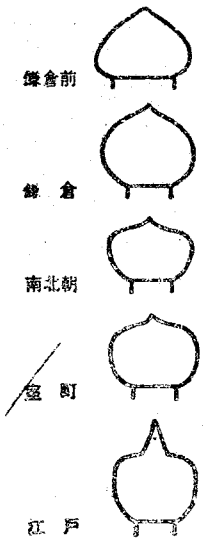
宝塔の塔身は無地の宝瓶形で後期以後は塔身に扉形等を刻み出しています。五輪塔の塔身は鎌倉中期以前は、角ばった球形で、後期

以後は裾ですぼまった壺形になります。

笠(図IX)、背が低くて左右によく伸び、軒は全体に反る真反りに近く、屋根の流れや、隅の降り棟の曲線のおだやかでおおらかなのが鎌倉中期以前の古風な様式です。

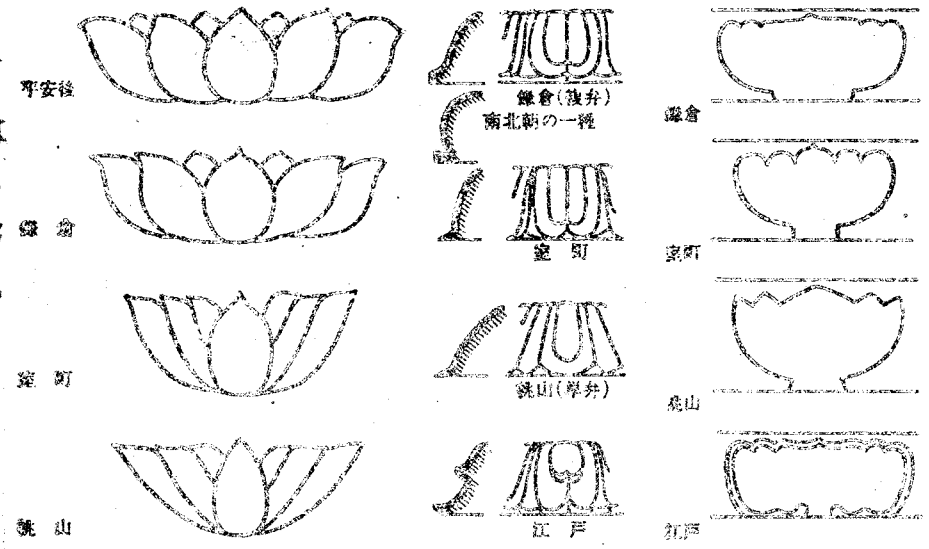


(図IX)



(図X)

宝珠(図X)鎌倉中期以前は少し押しつぶした様な形をしています。



(図XI)　(図XII)

地蔵堂　堂は普通は道路脇にあって、四本の柱によって建てられているところから「四ツ堂」と呼ばれています。そして奥側の棚に石像仏を祀る事によって俗にその石像仏の名をつけて、観音堂、薬師堂、地蔵堂などと呼ばれています。

この施設の源は仏教本来の福田思想から来たものと思われます。奈良時代の僧行基(668〜749)が、陸上交通に於ては布施屋と称する

無料宿泊所を多数設けました。これはインドの福田会或は福会の制の輸入と思われます。

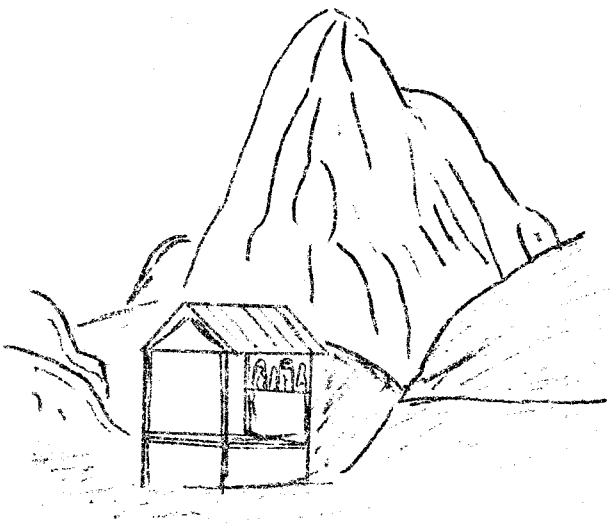
地蔵信仰　源泉は釈迦以前に、印度婆羅門教の神話中地天(地神)に求められます。　印度アーリア民族が持っていた神話中の最古の女神で「広大なるもの」という意があり、ギリシャ神話の地神と同様に大地を擬人化したものとされます。

釈迦仏に託されて、その入滅後、未来仏であります弥勒仏の出現までの間、無仏の世界に住み、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅人間、天上)の衆生を教化救済する菩薩であります。　俗説では児童の死後、賽の河原の救護者とされています。

地蔵の十徳としては、女人泰産、身根具足、衆病疫除、寿命長遠、聡明智慧、財宝盈益、衆人愛敬、穀物成熟、神明加護証大菩薩の徳があります。

巨石信仰　地蔵堂の後にある巨石です。現在では、この巨石の所から水が出て、この石を取り去ると水が出なくなると言う伝えを有する為に水の神としての信仰と考えられます。

元々はこの様な巨石そのものを神とする信仰があった後に、水の神としての信仰が付属したのではないでしょうか。



地蔵堂と巨石

薬師信仰　薬師瑠璃光如来が本来です。仏典では瑠璃国の教主とされ、日光菩薩と月光菩薩を従えており、「薬師三尊」と言います。　この仏は万病を治し、長寿を本願とし、経文に『仏となる以前に人の生存を完了し、衣食住の生活を安穏たらしめ、病苦、不具を除こう

として十二の誓いを立てた』とあります。

十二仏と大願成就　薬師如来は12仏と呼ばれる12の仏によって守護されています。12の仏様はそれぞれが12神将の本地仏であります。さらに12という数は一年の月、天地万物を表わし、また薬師如来が諸衆救済のためにたてられた大願、薬師大願をも表わしています。

1. 弥勒菩薩
2. 勢至菩薩
3. 阿弥陀如来
4. 観世音菩薩
5. 如意輪観世音
6. 虚空蔵菩薩
7. 地蔵菩薩
8. 文殊菩薩
9. 大威徳明王
10. 普賢菩薩
11. 大日如来
12. 釈迦如来

⇒（真言宗の場合）

生年	念持仏	縁日
子	千手観音菩薩（おんばざらたらまりく）	17日
丑（ウシ） 寅（トラ）	虚空蔵菩薩 おんばざら、あらたんのうたらく、そわか	13日
卯（ウ）	文殊菩薩 おんあらはしゃのう	25日
辰（タツ） 巳（ミ）	普賢菩薩 おんさんまやさとばん	24日
午（ウマ）	勢至菩薩	23日
未（ヒツジ） 申（サル）	大日如来	8日
酉（トリ）	不動明王	28日
戌（イヌ） 亥（イノシシ）	阿弥陀如来 おんあみりたていせいからん	15日

泉蔵坊　浄土真宗 本願寺派　無住。

弘安23(1286)年、存覚上人によって開山。本尊は阿弥陀如来、浄土真宗の教説は、信心の決定には別にむずかしい事は要求されず、ただ念ずる事によって、往生できて、それ以降の念仏は罪を消すための念仏ではなく、往生できた事のお礼の為の念仏となります。

阿弥陀信仰は、無量寿命の仏であります。弥陀が法蔵菩薩であった時に、悩める衆生を救済する為に四十八願をたて、その誓を成就して南無阿弥陀仏という名号を唱える衆生を極楽往生に導いて成仏させようとした為に、この信仰が生まれました。

山の神信仰 山の神は女神と見るのがもっとも一般的です。農民の信仰は、春山から里へ降りて来て田の神となり、秋収穫が終ると山へ帰って山の神となる。木地師の信仰はジク神と云ってロクロの神で、家の奥の間に棚をかけて、丸太を二つ割りにして、その中に細い棒をはさんでかずらで結んで祀ります。猟師の信仰は獲物があれば、その場で一部分を神に供えて祀ります。神社の祭神としては、一般に大山祇神か木花開耶姫が多く、山の神を天狗とする地方も多い。

このように多数の祀り方があるのは、本来、ヤマは多量多数の意で、山の神は無数に近い程の神々という意に通じるものと思います。

大山信仰 『出雲国風土記』に「火の神岳」、「大神岳」とあって古くから神聖視されています。また山伏の修行の場と大山は知られています。

大山信仰には地蔵信仰の死者の魂が行く山という信仰、「大山博労座」という牛馬の市があって、牛馬の守護の神という信仰、農作神で大山参りの途中で稲の穂を抜いて種籾に混ぜる風習があって豊作の信仰、成山儀礼として、男の子、女の子が大きくなると、大山参りをして、土産を買って部落や親類に配る風習も残っています。

スミレ（スミレ科）

屋敷神 屋敷の一隅か、それに接続した土地、又はやや離れた所有の山林等の屋敷の付属地に祀る神を

屋敷神と呼びます。家や土地を開いた土地の神を、先祖の霊と合わせて祀る様になったのです。その神を一族分家と共に祀る様になりますと、神格の高い神を祀る様になり、縁故の古い近隣の人達と共に祭をするようになります。つまり、地霊と祖霊とを合せて祀り、その神が除災と生業の守護を祀る様になり、同一目的を持つ同じ生活をする地域の共同体は、村中に連帯が出来て、ウブスナ様(産土神)となって大きくなって行くわけです。

石鎚信仰 伊予の石鎚山に対する信仰は古代から続いています。多くの庶民が参拝し始めたのは江戸時代からです。17世紀末になると講が出来始め、石鎚講の人々が石鎚権現を勧請して、石鎚神社として祀る様になります。

観音信仰 観世音の原語は光観と音声で、『世に光を与える名(音)の持主、すなわち光世音、なやめる衆生(世)の音声をみそわなす人』という意味があります。衆生の現実生活で遭遇するあらゆる苦難が菩薩の名を唱えるだけで即座に救われるとされその時に観世音が衆生を仏道に引き入れる為に開いている門戸の姿が三十三身あるとされています。

地神信仰 自然石に「地神」と書いてある物と、五角柱の石に「天照大神」、「大己貴命」、「少名彦命」、「埴安媛命」、「倉稲魂命」等と書かれ、地神塔と呼ばれています。この地神は屋敷神としても祀られていますが、次の様な信仰があります。

家の人が死んで三十三(五十)年たつと地の神になると考えられており、地神とは祖霊的なものと考えられています。

又、地の神は田の神と同じであるという信仰があります。

現在は土地の神、屋敷の守護神としての信仰が良く残っています。又、地神は同族神としての機能を持っているともいわれています。

芋原でも〈ふるさとの味〉名産品

ジュンラン（ジジババ）を塩漬けにしたものを茶通人は珍重します。桜の塩漬けと同じように、熱湯を注いで風味を楽しみます。祝膳などには、塩抜きをして、あえものや焼き魚のあしらいにもします。花の中開きのものを花茎ごと摘みとり、塩、自梅酢で漬け陰干しにして仕上げ塩をまぶします。

三次地方では作られています。

シュンラン（ラン科）

メモ

小祠の祭神一覧

— 神社明細帳による —

（古くからの祭神は必ずしもこれらに限らない）

小祠	祭神	俗称（異称）
荒神社	火之軒具土神、迦具土神、軒遇突智命	コウジンサン
山之神社	大山祇命	
十二神社	素盞嗚神、稲田姫命	
地神社	埴安姫命、保食神	ジジンサン
五穀神社	天照大神、大巳貴命、埴安命、少彦名命、稲倉魂命	ドウッウさん
山之神社	大山祇命	
十二神社	素盞嗚神、稲田姫命	ナニシンサン
大山祇神社	大山祇大神	ダイセイサン オオバンサン
御崎神社	タケミカヅチノカミ	
若宮社	天児屋根命　祖霊神	
天王神社	素盞嗚命	
高龍神社	罔水別神、国水別神	リオウサン
山王神社	奴留彦命	サンノウサン
八幡神社	八幡大神、豊日別命	
道祖神	自然石、山の峠、路の分岐点、村境などに祀ってある。	
地神	自然石、しめ縄をとり替え餅や神酒を供えて この日は田畑の仕事、土いじりをしてはいけないのです	

月ごとの祭(祀)と講のある生活の記録

私達の日々の暮しの中には、月ごとの祭りや行事があります。正月を迎えて元朝詣に出かけ、春の彼岸には墓参りをと、家ごとに内輪で先祖伝来のマツリが営まれ続けています。

この度の芋原への探訪は、私にとっては旅ではない。父祖伝来の土地を耕作して暮す――即ち自然と共に生きてきた生活――現在の実相を目の当りにして、過去への感傷を許さないものが私に語りかけてきます。それは未来への祈りにも似た思いです。

数回に限った、数人の方々との話によると、日常的なマツリやコウは、自分達の生活の必要な守護神を中心にして、近隣相互が地縁的に結びつき、部落の共同作業である道普請、共有林の管理、葬式の世話などと同様に、すべてドイ、ジゲ、組などを単位として行なわれています。マツリやコウの当日は、当屋が順番であたり、祭礼は簡単な祝詞奏上だけで、そのあと直会(ナオライ)(酒宴)を行ないます。

食物も献立は大体似通っています。

- ○みそ汁
  - とうふ
  - あげ・しいたけ
  - 青味
- ○すまし汁
  - かまぼこ
  - 大根・青味
  - 里芋
- ○あえもの(白あえ)
  - こんにゃく
  - ほし柿、リンゴ
  - にんじん、とうふ

○煮物(煮メ)　○豆腐「冷やっこ」　○漬物
○にぎりめし　○豆ごはん

コウジンサン・ワカミヤサン・ジジンサン・カンノウサン
ドウツウサン・ジオウサン・ダイセンサン・雨ヨロコビ
コタツマツリなどが多くの神々や講

	芋原	四川	菅町	わが家の場合	その他
1月	歳旦祭 福引会	ダイセンサン	コウジン カンノン		オヒマチ
2月		コウジンサン モモカ	コウジン モモカ		
3月		ジジンサン			コウジン シャニチ ジジンサン
4月	雨ヨロコビ				
5月			適宜		ダイセンサン
6月			「雨ヨロコビ」		テンノウサン
7月		夏祭			
8月	雨ヨロコビ 盆カラオケ大会 ※サンノウサン				
9月		テングサン ジジンサン			
10月	愛田神社 秋祭	コウジンサン	秋祭		秋祭
11月	※サンノウサン				
12月	若宮さん ヤニ神様 カンジョウコウ	コウジンコウ カンジョウコウ	サンニンコウ		トウジンタイ テンジンコウ
備考	組に分かれて 順次担当する 神泉と年モウシ	13軒の内 2軒づつが 当番であたる	毎月1日 コウジンサマ 毎月18日カンノンサマ 29軒の内 2軒づつが当番で献る	※ 空ランは 各自が記入 願い付	種の場合 6軒 サンノウサン ドウフツウサン

※種（6軒の内2軒づつで当番）

竜田神社の狂歌額　竜田神社の拝殿には、明治時代に奉納された狂歌額二面があります。当時の近在風流人の面影がしのばれます。北山村の光隠軒、千里、千種とは一体だれのことなのでしょう。
種の「山王宮」にも同種のものが奉納されているそうです。

竜田神社の秋祭と神儀　先佛は踊り(14～15名)が鳥居まで続きます。ハネは本殿を三回まわります。神儀の納めは三通りあります。

竜田神社のハネ　――――　佐藤 要氏の話

昔のハネの流儀は、加茂系(種、芋原、蕾町)でした。
明治の頃から型がくずれはじめていた。改めて型を直そうということになりました。当時、芋原へ市村から養子に来た人が、土地の人達に教えた時から、市村系、すなわち、沼隈系に変わった。その後も再度市村の人を呼び、型の見直しをして、現在の芋原の型になったのです。
※ 沼隈のハネ――――広島県無形文化財
昭和六年の賀茂神社祭礼の祭員のうち奏楽人の中に広瀬村松井文市氏の名が残されている。

神楽(七年モウシ)
※(神儀の行列等は、改めて秋祭りに探訪して記録を完成させたいと思う)著者

荒神さん

竈(かまど)神社ともいいます。家の台所に祀る土公(どくう)神と同じ神です。(神体は石幣、木像)
荒神さんは作物の神です。氏子の者は集って春秋の祭をしたり、部落の行事や事業を相談したり、加地子(かじし)や、山林の収入を元にして、講を運営したりしました。つまり、部落の政治、経済、情報、文化の中心でした。講のもつ内容は、地域差はあるものの、目的は民間の互助的な救済組織で
また七年目毎の大祭を「七年モウリ」と言い、男の子の祭りとし、神輩を奉納します。

（モモテ講）——旧2月誕生日

十二神さん ——芋原には二ケ所にあったようです。

道通さん

蛇をツカイセミとする道通信仰、たたり神。頭部には白、または、薄黄色の輪のある黒色の小さい蛇で、それがひどくたたったり、ついたりします。それを管理する祈祷者、ことに巫女が活躍します。

若宮さん

本宮に対して、その御子神を祀る神社を言います。人の霊を慰めるために祀られた社だとのことです。

雨ヨロコビ

『旱天続きで農家の困っている時、待望の雨が降ると皆ほっとします。その時、字の世話役から「雨喜び」の布令が出されます。「雨喜びだから休んで下さい」という言い継ぎです。布令が出れば、百姓は仕事を休み、お萩や団子を作って祝います。』——「加茂谷」より抜粋——

社日 秋分の日（春分の日）にもっと近い戊の日で、土地の神である地神さまを祀る。村の路傍や神社の境内に大きな自然石の地神の碑が建っている。この日地神様のしめ縄をとり替え餅や神酒を供えて、飲食する。この日は田畑の仕事や土いじりをしてはいけない。

○メモ

八幡さん

神仏混合の推進者です。

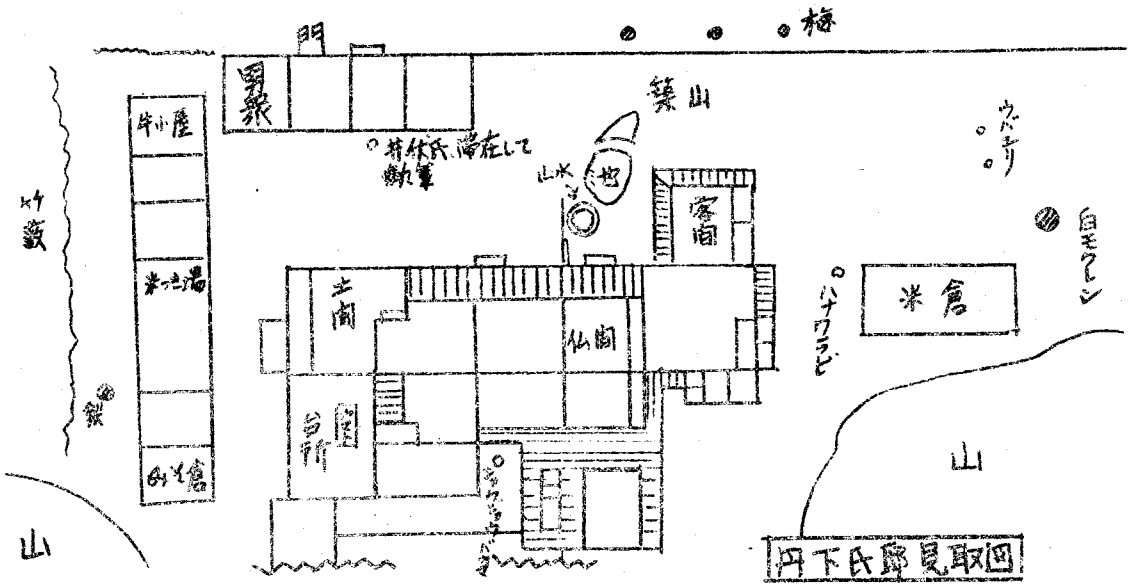
八幡大神 —— 阿弥陀仏
神功皇后 —— 愛染明王
比咩大神 —— 地蔵菩薩
若宮 —— 十一面観世音
高良明神 —— 勢至菩薩

(42)

丹下氏邸と井伏鱒二

昭和文学全集（角川書店版）年譜によると

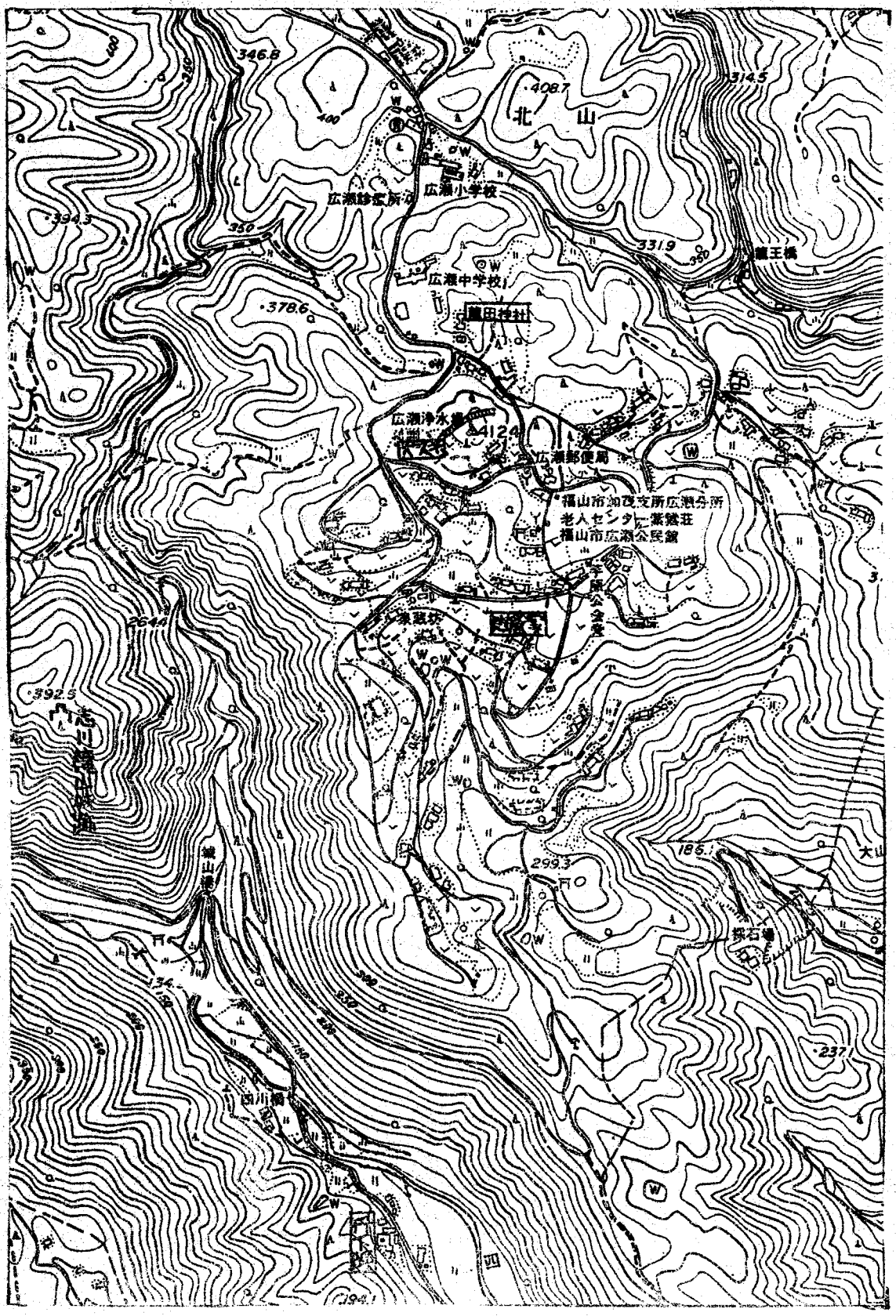
昭和15年（1940）43才　2月　「丹下氏邸」短編集、昭和名作選を新潮社より刊行。------『「丹下氏邸」は四川の丹下邸と生家の井伏邸とが重なり「白毛」は四川での釣りであり、「川」は深山から発した流れであり、「さざなみ軍記」は鞆の浦を中心とした瀬戸内の島々での平家の若武者の戦を情感をもって記されています。』と館上敬一氏は述べています。



北山の年表

平安	よよ7年(仁和3)	大明神、八幡宮造営。社領70貫ありという(『水野記』)
鎌倉	1220年(承久2)	笠木山高松院建立。社領120貫ありという(〃)
	1249年(建長元)	松頼山照専寺創建。浄入の開基
	1286年(弘安9子)	松本山、泉蔵坊、存覚上人開山
室町	1441年(嘉吉元)	国衙領安那郡(北山村ヲ含ム)の守護代官として高山氏の名が見える。
	室町時代	宮式部大夫、高松院に寺領を寄進する。
	1492年(明応元)	宮三郎義兼、滝山城を築く。
	天文年間(1532~54)	北山村の領主は宮次郎左衛門、滝山城主は宮越後入道光音。
	1538年(天文7)	薬師如来像作られる。
	1548年(天文17)	宮次郎左衛門、その居城(中条カ)を大内氏に攻められ没落。
	1552年(天文21)	毛利元就、滝山城を攻め落す、宮光音、備中国に逃走。
安土桃山	1591年(天正19)	安那郡は神辺城主毛利元康の領分となる。
	この頃	毛利氏、北山村大明神、八幡宮に社領を寄進する。
江戸	1600年(慶長5)	福島正則、芸備49万8千石の大名として入封。
	1619年(元和5)	水野勝成、備後南東部7郡と備中の一部を領地として入封。
	1702年(元禄13)	幕府は備前岡山藩に命じて福山領内の検地を行う
	1717年(享保2)	豊前中津領となる。
	1736年(元文元)	この年、洪水あり、五穀不熟、中津領に百姓一揆起こる。　竜田神社の鳥居建立
	1745年(延享2)	中津藩、「定弘」を廃止。
	1760年(宝暦10)	36ヶ村に籾2千俵を積み貯蔵し備荒用とする。

江戸	1761年(宝暦11) 竜田神社の燈籠建立
	1777年(安永6) 「定引」復活のため藩庁に愁訴。翌年却下。
	1781年(天明元) 「定引」が復活する。
	1804年(文化元) 八幡宮の鳥居建立
	1831年(天保2) 四宮の石燈建立
	1840年(〃 11) 大洪水起る(5月29日～6月5日大雨)
	1847年(弘化4) 竜田神社の燈籠建立
	1856年(安政3) 雨乞祈願行われる。
近現代	1871年(明治4) 廃藩置県により中津県となる。庄屋を廃し戸長、副戸長を置く。 中津県を廃し、深津県とする。
	1872年(〃 5) 深津県庁を福山より笠岡に移し、小田県に改め、大区小区の会議所を小島に置く。 (安那郡は第6大区 北山、百谷村は小18区)
	1875年(〃 8) 小田県を廃し、岡山県に合併、福山支庁をおく。
	1876年(〃 9) 岡山県内備後6郡を分割し、広島県に合併
	1889年(〃 22) 百谷村、北山村を合併、広瀬村となる。
	1955年(昭和30) 広瀬村、加茂村、山野村が合併して加茂町となる。
	1975年(〃 50) 福山市に合併される。


北山
346.8
408.7
314.5
400
広瀬診療所
広瀬小学校
394.3
350
331.9
龍王橋
広瀬中学校
378.6
広瀬浄水場
412.4
広瀬郵便局
福山市加茂支所広瀬分所
老人センター集会所
福山市広瀬公民館
264.4
392.5
299.3
185
大山
採石場
237
134
四川橋
四

(編集)備陽史探訪の会
(発行)1985年3月31日